

## ごあいさつ

中部大学民族資料博物館の2019年度秋季企画展「学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展を開催いたします。

中部大学春日井キャンパスは濃尾平野を一望できる、約37万6千平方メートルにおよぶ広大な丘陵地にあります。創立者、三浦幸平をはじめとする創設期の関係者らの意志を継ぎ、第三代理事長の西良三は、工学部の伊藤平左エ門名誉教授（当時）をはじめとする教員や学生たちと共に、春日井キャンパスの中心となる地に、千利休の茶室の復元および書院建築の移築、茶席の建築、日本庭園の整備を実現させました。そして現理事長の飯吉厚夫は学園創立80周年の節目に、本学に学ぶ若人が飛龍となって巣立つよう祈願し、この庭を含む緑の木立一帯の水景を「潜龍池」と名づけました。

中部大学春日井キャンパスは大学構内に庭園や池泉を複数保有し、建築と緑化の融合する総合的な計画を継続して推進しています。このたびの展覧会は、大学の庭を考える企画展覧会として、約2年前より民族資料博物館が構想を始め、学園創立80周年記念事業の一環として、作庭と改修および修繕に携わった岡田憲久氏の協力を得ながら準備してまいりました。

岡田憲久氏は、1989年より景観設計室タブラ・ラサを主宰するなか、名古屋造形大学で教鞭をとられています。設計された庭園の代表作は主に愛知、三重、大阪にあり、多くは空間の持つ意味を掘り下げ、新たな景観を創作する独創的な庭園設計を試みるもので、国内外において高く評価されています。

本学における、岡田憲久氏による茶室の「工法庵」・書院の「洞雲亭」の庭園、「みなもの庭（2号館中庭）」、「花鏡の庭（25号館中庭）」の3作品は、「大学の庭/GARDEN」に特有のメッセージを込めた場所といえるでしょう。

作庭家、岡田憲久氏による中部大学の庭をご紹介しますことで、大学の庭の本質を考え、美しい景観を末永く維持していく意識を本展のなかで、あらためて皆様と共有できれば、これほどの喜びはありません。

最後になりましたが、本展開催にあたりご支援、ご協力くださった関係各位に深く感謝申し上げます。

中部大学民族資料博物館長 荒屋鋪 透

## 中部大学の3つの庭 それぞれの時間

庭に関わり始めて45年近い歳月が流れるが、庭とは不可解で、また魅力的なものであるとの思いが増すばかりである。庭は意図された場合もされない場合も含めて時間とともにその形状を変えてゆく。建築や絵画や彫刻、その他の美術工芸品と異なる庭のこうした特殊性は、いかなる指標により読み解き、どのような価値として認識すればよいのだろうか。

中部大学のキャンパスは多くの自然を残しキャンパス全体が庭であるといえる。そのキャンパスの中の異なる自然の状況の3つの場において、3つの庭を作る機会を得た。1991年の「工法庵・洞雲亭庭園」。すでにある自然の中への立ち入り方のデザインであった。1994年の「みなもの庭」。四方を全て建築に囲われ閉ざされた空間の中での自然の語りであった。2002年から2003年にかけての「花鏡の庭」。これはわずかではあるが元の自然を残すことに苦慮し、庭として切り取られた外の自然ともつながりを持たせた空間のデザインであった。

このたび展覧会に合わせ補修と言う形でそれぞれの空間に再び関わりを持つ機会を得た。

3つの庭では、作庭時のそれぞれの場を持つ、そこにしかない自然に手を加え生み出された空間が、それぞれの異なる時間によりそれぞれの形へと変化していた。人は身の周りのすぐそばでは、生の自然をそのままストレートに受け入れることはできない。今の時間に対する自然との関係の在り方を求めたのが今回出来上がった3つの庭の姿である。時間を超えて変化する自然をデザインの軸に置き、変化する自然との関係を時間のデザインとして捉え、巧んでいる。多くの自然を残しキャンパス全体が庭である中の3つの小さな空間を、更なる庭として、私なりに庭とは何かと問うてみた。大学と言う学びの時間と空間で、学生、教職員がこの巧まれた自然としての3つの庭を介し、自然そのもの、さらにはその背後にあるものに、目で、心で触れる場となっていれば幸いである。

最後に今回の企画とその開催にご尽力下さいました中部大学民族資料博物館の皆様をはじめ関係者の方々に深く感謝申し上げます。

岡田 憲久